日本女医会誌
復刊第153号
題字　吉岡弥生

巻頭言

副会長　加藤竺子

日本女医会の皆様には1998年の新春をお健やかにお迎えのことと存じます。昨年は毎日のニュースで信じられないような政財界の不祥事が相次いで報道され、また一方、理解に苦しむ不気味な少年犯罪や、予想だにしなかった銀行や証券会社の倒産、景気の低迷等々……まるで世紀末の悪夢のような不安と不信の中で新しい年を迎えました。

去る12月には地球温暖化防止京都会議で日本は議長国として世界の参加各国の調整に大変難行しましたが、どうやら温暖化防止議定書も採択されました。今や世界の環境問題は一国一地域では解決できない地球レベルの問題であり、産業革命以来化石燃料の使用を前提として経済成長のみを追求してきた人類への厳しい反省が求められています。

バリアフリーとなった世界中を急速度でメディア情報がかけめぐる時代、果たして二十一世紀に日本がこの国際社会の競争に生きのこることができるのか、そのための実力をつくるためにも行財政の改革が必須であり、新しいパラダイムを求めて、国民はいまこそ、賢明に忍耐強くがんばって改革を押し進めねばならないのだと思います。

医療の分野でも高齢少子社会にふさわしい医療供給体制の確立が急がれています。医療保険・医療提供体制の根本的改革案をめぐって賛否両論、問題多しとされた介護保険法もあっと言う間に成立し、2000年4月から医療や公的年金に加え新たな保険料の徴収も行われます。また今年の通常国会には薬価制度や診療報酬体系の見直しも審議されるようで、医療現場の厳しさがひしひしと押し寄せています。

日本女医会も世の中の動きを敏感にキャッチしながら、賢明な会の運営と会の発展を考えてゆかねばならないと思います。男女共同参画二〇〇〇年プランもでき、国内行動計画の四つの基本目標と十一の重点目標が示されました。女性としてまた医師としてプロフェッショナルな立場からの視点で関心をもち、真に平等な社会づくりのために努力しなければならない分野が多いと思います。二十一世紀は女性の時代ともいわれてはいますが、私たち女性自身の意識の改革と賢明な選択、たゆまない努力で男女共同参画の豊かな社会づくりに努めたいものです。女らしさ、男らしさという社会的文化的に長い歴史の中で作り上げられたジェンダーと生物学的性差とを混同せず、一人の人間として自分の人生を自分らしく生きることを大切にしたいものです。

先日若い一会員の方から会へお手紙を頂き、女医として仕事と人生を両立するための環境整備についてのご提言があり、共感を覚えました。既に医学部の女子学生が半数近くになろうとする時代、先輩として働きやすい環境条件の改善にどのような支援ができるのか、簡単ではないが大切な課題として声を広げてゆきたいと思います。

もくじ

巻頭言……加藤竺子（1）
〈年頭所感〉
北海道・斯波憲子（2）　香川・松浦俊子（3）
青森・前田慶子（2）　愛媛・高岡明生（3）
秋田・金子ミサヲ（2）　高知・浜崎浜子（3）
山形・岸よし（2）　福岡・水田祥代（3）
宮城・山本蒔子（2）　佐賀・諸井ミサヲ（3）
福島・兼谷啓（2）　長崎・石井伸子（3）
広島・宗像壽子（2）　宮崎・隅初音（4）
〈第11回ワークショップ〉
「手で触れて画像診断」を主催して……平敷淳子（4）
第11回ワークショップに出席して……中村西子（4）
＊
お詫びと感謝……佐藤千代子（5）
会長代行を仰せつかって……橋本葉子（5）
「国吉レベカ」先日来日……橋本葉子（5）
「医師の需給に関する検討会」報告〈第2報〉……橋本葉子（7）
渉外部だより……田中蘭子（7）
第24回国際女医会議の現況……橋本葉子（8）
〈私の大学〉関西医科大学……西島攝子（9）
ロシアの旅……稲生襄（10）
理想の福祉ゾーン建設、私の仕上げの仕事に……荷見ヒサ子（10）
「九十三歳、今日を愉んで生きる」に寄せて……村田郁（11）
「選択的夫婦別姓に関する民法改正について」の陳情……橋本葉子（12）
平成8年度日本女医会学位取得者一覧表……（12）
・医学用語豆辞典……（4）
・日本女医会年金について……（6）
理事会議事録……（12）
会員動静……（14）
編集後記……（14）

年＊頭＊所＊感

北海道支部
斯波憲子

明けましておめでとうございます。

昨年は日本全土をおおう先の見えない不況の中、医療費の患者負担も増えるなど、医療を取りまく状況も厳しくなり、さらに最高裁の女性判事や女性閣僚がいなくなるなど、暗いニュースが多くなっておりますが、少しでも女性の力で元気さや明るさを取り戻したいものです。登校拒否をテーマに開いた公開講演会では二五〇名の市民の方が参加し、フロアからの発言も多く、八〇名の方が長文のご意見を寄せて下さり、成功裡に終了しました。また医療において女性が不快と感じたり疑問に関する一一〇番を開いたところ、二二名の訴えがあり、大部分の方は話すことで疑問や不安を取り除くことができ、対処できるものは対処致しました。

これからも医師と患者の信頼関係の確立にさまざまな取り組みで女医会として力を尽して行きたいと思っております。

青森支部
前田慶子

会員の皆様に謹んで新年のご挨拶を申しあげます。昨年は、国際レベル、地球レベルでの対外問題に多く遭遇致しました。また国内では、善意の人々の愛情や努力を裏切る数々の事件が起こるなど、世相に不安さえ感じました。医学界においても、臓器移植など、先端医療をめぐる倫理的な判断が必要とされております。私どもも医師として、社会や医学界の趨勢に積極的に目をむけ、正しい判断と価値観を見失わないように努力したいものです。

戦後の日本が築き上げた平和を、人々のエゴで踏みにじられることのないように、お互いに前向きの努力を惜しまない平成10年でありたいと思っております。

秋田支部
金子ミサヲ

あらたまの年のはじめに、心新たな願いをこめてこの年の平穏と招福を強く祈らずには居られません。

バブル崩壊からはや数年、政治、社会、経済と、よもやの出来事（金融機関の破綻など）相次ぎ、何か不安と希望を見失いがちな昨今です。

唯一、宇宙遊泳、衛星のキャッチングの成功をおさめた土井隆雄さんの快挙のニュースに胸踊らせました。ブルースカイ（宇宙）への挑戦の夢は少年少女の頃から芽生え、はるか未来へと、過去の人々の栄光とともにうけつがれて行くのでしょう。個々の俊秀も愛情溢れるまわりの小さなはげましの一言が突如としてやる気をおこすといいます。

少子化の時代、若い母親に子育ての楽しさ、幸福感の雰囲気作りを与える医師でありたいと。小さな所感です。

山形支部
岸よし

謹んで新年のお慶びを申しあげます。

年頭にあたり、日本女医会のますますのご発展と、会員皆様のご健勝ご活躍を心よりお祈り申しあげます。

当県のニュースを一つ。

昨年、12月1日の朝日新聞山形版に「私財を投じ『文武の場』、剣道場兼ホール落成」の見出しで、三條かの先生が総工費約一億円を投じ「武道という伝統文化と新しい文化の役に立てば」と、かつて眼科を開業しておられた地に会館を建てられました。先生のお名前をいただき、「三條かの記念館」とされた由、報じられました。

同県に居ながら、なかなかお目にかかれず残念に思っていたところですが、三條かの先生は1902年、米沢市のお生れ、大正15年東京女子医専第七回のご卒業、昭和9年、日本医師会で女性初の眼科医学博士になられ、戦後米沢市に眼科をご開業、昭和57年市篤行賞を受けられる等多くの表彰を受けられ、昭和62年に、五十三年間にわたる医業を閉じられました。現在九十五歳でかくしゃくとしておられる由です。

みちのくに咲いた大先輩の快挙を春風に乗せてお送りします。

宮城支部
山本蒔子

明けましておめでとうございます。

宮城支部の今年の活動は、2月7日に開催します日本女医会公開講演会の準備で始まります。テーマは街のバリアフリーです。

日本の街は、健康な人には快適ですが、障害者や高齢者を考慮に入れて作られていません。二十一世紀に向けて、これからの街作りに必要なことを、女性医師の視点から提案したいと想い企画しました。全国の会員の皆様のご参加やご声援をお願い申しあげます。

福島支部
兼谷啓

新年おめでとうございます。

社団法人日本女医会のご発展と、会員皆様のますますのご健勝とご活躍を、祈念申しあげます。

昨年は多難な年でありました。二十世紀の「ひずみ」が一挙に吹き出したような観がありました。人類が快適な生活を求めて原野を切り拓き、文明を築きあげました。そして、いつの間にか、人工的に作られた環境の中でしか、生きることができない存在になりました。命の重みさえも軽んじられています。いのちを育むものとして、女医が果たさなければならない役割は大きいものと思います。

郡山医師会は創立五十周年祝典を終え、菊池寿子先生のご功績が賞されました。本年は「心の時代」を採り上げ研鑽に励みたいと思います。

どうぞよろしくご指導下さい。

広島支部
宗像壽子

謹んで新年のお祝詞を申しあげます。女医会の先生方には献血健診をたいへんお世話になっています。

昨年4月頃に現れたヘール・ボップ彗星は次は2379年に現れるとのこと、ミクロの世界で闘っている私どもには、あらためて、悠久の宇宙の中で今を生きるという一人一人の命の輝きのために、それなりに努力して行きたいと考えています。

女医総会橋之助踊るや初夏の宵
毛利展大河ドラマも終えて冬
雪おこし吹きすさぶ中献血す

香川支部
松浦俊子

明けましておめでとうございます。昨年来、パーフェクト食に熱中した年でしたが、昨年末、体調を崩し、初めて年齢を考えずに過ごしてきた一年間をふり返りつつ、いかに健康が大事かということを痛感いたしました。そろそろ高齢化している女医会の者どもは、そろって今年こそ、年齢を考えつつ、健康第一の生活をして参りたいと念願しております。

愛媛支部
高岡明生

明けましておめでとうございます。今年は寅年、大いにこの勢いをかりたいものと思っております。

近年、わが国は少子化が進み、平成7年の出生数は史上最低で、合計特殊出生率（一人の女性が生涯に産む平均子供数）は一・四二と過去最低となり、現在の人口を維持するのに必要な二・〇八を大きく下回り、深刻な状態となっております。子供の数を増やすためには一人当り三人の出産が必要となってきます。

女性医師においては、大学卒業後、研修を終え、診療、研究に没頭する時期が、ちょうど出産、育児に適した時期であります。両立は負担も大きく大変ですが、何とか是非両立していただきたいと思います。政府も、エンゼルプランや男女共同参画型社会にむけ力をいれています。どうか皆様の優秀な二世たちに二十一世紀の日本を是非托したいと思います。どうぞ一人三人を目標に頑張って下さいませ。大いに期待しております。

高知支部
浜崎浜子

明けましておめでとうございます。皆様よいお年をお迎えになられたこととお慶び申しあげます。

昨年は、総会屋、銀行倒産、その上、薬代徴収、本人二割負担などの医療保険の改正と、暗い事ばかりでしたが高知からは、爽やかなニュースをお知らせいたします。

昨年11月、土佐山田町の野中神社（通称　お婉堂）の敷地に県内の女医たちの寄付による句碑、歌碑が三基建立され、四国唯一の「歌碑公園」が完成しました。この公園には、大原富枝さんの歌碑ほか二十一基が並んでいます。土佐の女医の草分け、と言われる婉女のお堂が再興されたのです。

今年は、明るい話題に包まれることを期待しています。会員皆様のご健勝とご活躍をお祈り申しあげます。

福岡支部
水田祥代

明けましておめでとうございます。今年も自然体で気負わず、力まず、事があれば逃げることなく正面からぶつかっていき、新しい風を吹かせたいと思います。そして今年こそは、福岡支部の目標―会員の増加と活発な活動―を達成したいものです。

本年もどうぞよろしくお願い申しあげます。

佐賀支部
諸井ミサヲ

明けましておめでとうございます。平成10年を迎え、新しい希望に燃えご活躍の会員の皆様にあやかって、私どももがんばりたいと思っております。

会費が銀行振込みになって、安心しておりましたら、会員が減少したように思えます。今年は新しい若い女医さんが入会してくださるよう皆で努力せねばと思っております。

日本女医会の発展を祈ってやみません。

長崎支部
石井伸子

第43回定時総会および学術会議のご案内
5月16日（土）宇都宮市で開催

開催日　平成10年5月16日（土曜日）
会　場　宇都宮ロイヤルホテル
栃木県宇都宮市江野町11番16号
TEL　028（633）0331
FAX　028（634）2402

日　程　●5月16日（土）

(1)受　付	9時30分～12時	宇都宮ロイヤルホテル
評議員会	10時30分～12時	
昼　食	12時～12時40分	
総　会	13時　～　15時	
休　憩	15時～15時20分	
記念講演	15時20分～17時	

演題　「臓器移植をめぐる諸問題」
講師　東京女子医科大学名誉教授　太田医学研究所所長　太田和夫先生

(2)懇親会　18時～20時　宇都宮ロイヤルホテル
アトラクション　さかはし矢波フルートコンサート＆弦楽四重奏

●**観　光**　5月17日（日曜日）

○Aコース（日光コース）
宇都宮＝日光杉並木＝日光（輪王寺、東照宮、眠猫、宝物館）＝堯心亭（精進料理）＝やぶさめ（桟敷席）＝小杉放菴記念　日光美術館＝東武日光駅＝日光IC＝宇都宮IC＝JR宇都宮駅（16時30分ごろ）

○Bコース（益子コース）
宇都宮＝陶芸メッセ益子＝益子参考館＝つかもと（絵付け、お買物）＝JR宇都宮駅（15時50分ごろ）

明けましておめでとうございます。

昨年は金融機関の相次ぐ破綻という厳しい社会情勢の中、景気回復の足音も遠いまま暮れました。今年こそは希望に満ちた明るい年であれかしと祈らずにはいられません。

長崎支部では、昨年の春、前任の後藤すみ子先生から支部長を引き継ぎました機会に、本当に久しぶりに会員の懇親会を開きました。遠方からも駆けつけていただき楽しい語らいのひとときを過ごすことができました。先輩の先生方の若かりし頃のご活躍ぶりにはすっかり圧倒され、ぜひ若い方々にお伝えしたいと思ったことでした。現在長崎支部の会員数は約三〇名、これからの会の在り方を模索しています。各支部の先生方からもお知恵を拝借できれば幸いです。どうかこれからもよろしくお願い申しあげます。

宮崎支部　**隅　初　音**

新春のお慶び申し上げます。

宮崎県という遠隔の土地柄、日本女医会には参加しないまま今日に至り、女医の国際貢献や、学術研究も不足がちで、相すまなく思っている昨今でございます。

戦後五十年、超高齢少子化社会となり、社会構造全般において大きな変革が求められております。あらゆる面で制度疲労を露呈し、なお医療保険制度改革は保険財政危機に直面し、国民的合意形成が得られぬまま論議がすすめられております。二十一世紀の福祉社会をきずくために、次代を担う若い先生方を始め、女医会としてたくましく命を大切に生き、本年も良い年であるよう願わずにはおられません。

全国の女医さん方のますますのご活躍とご健康を祈り、ご発展を願っております。

第11回ワークショップ ■平成9年12月20日(土)・京王プラザホテル

第11回ワークショップ『手で触れて画像診断』を主催して

学術部　**平敷淳子**

『画像診断』という言葉が臨床に導入されて久しい。各種画像法を用いて、診断をしていく分野であるが、放射線科医を中心に行われている。

今回は胸部、腹部の画像をシャーカステンを用いて、ベテラン四名の講師によってご教示願うという趣向のワークショップを企画しました。

参加者の先生方はもちろん、講師の先生方も〝何が始まるのでしょう〟という期待と不安で待ち受けました。京王プラザホテルのシャンデリアの光が落とされ、シャーカステンにスイッチが入りますと、講師の上野恵子（東京女子医大）、鎌田憲子（都立駒込病院）、昨山携子（聖マリアンナ医大）、成松明子（栗橋済生会病院）各先生方は水を得た魚のように、〝さあ！〟、〝では！〟と一斉に写真を掲げられました。ご持参くださった重いフイルムです。

私は、〝きっと、参加して下さった先生方には、ご満足いただける！〟という自信がありました。期待どおりでした。

先生方はそれぞれテーマをお持ちで、熱心に正常解剖から異常像までを、放熱するシャーカステンの前に立ちどおしでお話しくださいました。胸部と腹部とのCTが分かると同時に従来の単純X線写真の重要性をも再認識できた会でした。

参加者は学生三名を含む六六名。

第11回ワークショップに出席して

世田谷支部　**中村酉子**

このたびのワークショップのテーマは「手で触れて画像診断（胸部・腹部）」でありました。出席者は少人数（一五名）のグループに分けられてシャーカステンの前で放射線科の専門医の女医先生からたくさんのフイルムを見せて頂きながら読影の基礎となるいろいろの点につき受講いたしました。大変分りやすいご説明で一同は二時間の講義の終りますのが残念なくらい熱心に学びました。

近年は画像医学の時代といっても過言ではなく、この分野の発展は目覚しいものがありますので、私ども会員のために有益なワークショップを企画して下さいましたことを日本女医会学術部に感謝申しあげます。

腹部の画像診断では主としてCTの読影を学び、肝のびまん性疾患と腫瘤性の病変の鑑別を理解できるようになり、さらに造影CTや最先端のスパイラルCTにも及び、興味深い講義でした。また膵疾患では今後MRIの導入の進歩により、膵の早期癌診断にも近い将来の期待がもてるようです。

胸部の画像診断では一枚の単純撮影の診断が最も重要であることを今さらながら習得致しました。そのためには広い知識を必要とするようです。

たとえば肺野に炎症性の陰影があり、これが肺癌の中の肺胞上皮性のものであるフイルムを供覧され、私どもも大変勉強になりました。またAIDSの際のカリニ肺炎像も初めて見ましたが、ユニークな陰影で印象に残っています。

私が最も有難く感じましたことは、最近の医学雑誌の別冊を出席会員にお配り下さいましたことです。それは〝CT検査〟〝肝のCT〟及び〝読影のための正常解剖〟の三種類のもので、帰宅してから一生懸命に読みました。今回のワークショップはまことに有意義であり、今後も出来得る限りこのテーマを続けてくださることを望みます。

新医学用語豆辞典

thermoplooingとは

脳内熱貯溜の意味で重症脳損傷を受けた例では再還流後に十分な全身循環機能が安定せず、低下すると脳温の洗い流し障害により脳温が38～44°に上昇し、脳内熱貯溜現象がおこる。これは、脳血管自動調節障害、組織酸素代謝の亢進を来たし、脳虚血を助長し脳圧亢進を増悪させる。

お詫びと感謝

会長　**佐藤千代子**

9月30日、思いもよらなかった脳硬塞（中大脳動脈起始部）という状態になりまして、女医会会員の皆さまに大変ご心配をおかけ致し、会員の皆さまからのお見舞のお言葉やらおはげましのお言葉をいただきまして、ただただ感謝申上げております。そのつど、先生方のお元気でご活躍のご様子を拝して、何よりも嬉しく存じております。

毎日病室の窓から去来する雲を眺めているだけで、食欲もなく、半身不随のため動くこともままならずの毎日は、人間としての存在も否定したい気持になってしまいます。平凡でも日々の生活が健康であることがいかに大切か、自分が患者の立場になってこそ、深く思いを致すものでございます。

先生方、どうぞ充実した一日一日を大切にされましてご活躍されますようお願い申しあげております。

幸いに10月6日にICUから普通病棟に移りまして、リハビリに励んでいる毎日でございます。単調な運動の繰り返しがリハビリですが、これが人間の機能回復にいかに有効であるか認識すれば、単調な運動の繰り返しもいかに意味のあるものか、自分の身体自身に覚えさせられますので必死に励んでいます。また、さっさと歩いて皆さまとお目にかかれますことを祈りながら。

幸いに会務のことは、すばらしい三副会長にご協議の上、完璧に運営していただいておりますので、安心して回復への努力をいたしております。

本当にありがとうございました。

会長代行を仰せつかって

副会長　**橋本葉子**

佐藤会長ご入院の第一報が届きましたのは10月2日(木)のことでした。9月27日の理事会にはお元気だったのにとびっくりし、早速臨時理事会を10月11日(土)に招集し、今後の対応を検討いたしました。橋川先生からご病状を伺いましたところ、左完全片麻痺とのこと、幸い言語は健全で意思の疎通は十分出来るとのことで、不幸中の幸いと集まった理事は一応胸をなでおろしました。しかし、当分の間は入院しながらリハビリテーションを続ける必要があるとのことでしたので、定款第16条(2)「副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する」に従い、三人の副会長のうち誰かが会長職務を代行することで意見の一致を見ました。

現在、庶務・事業担当の副会長は石原幸子先生、会計・渉外担当は加藤竺子先生、広報・学術は橋本が担当しております。加藤副会長は福岡にお住まいですので、代行職務は大変だろうということで、東京在住の石原先生か橋本が代行するということになりましたが、橋本が一番時間的に余裕のある職務にいるというのが最大の理由で、代行に推薦されました。このような次第で佐藤先生のご病状を見ながら当分の間という制限付きで、橋本が会長職務を代行させていただくことになりました。不慣れな上に生来出不精で外交は全く不得手という、会長職には不向きの橋本ですが、せいぜい頑張りますので、倍旧のご支援、ご協力を賜りますよう、なにとぞよろしくお願い申しあげます。

佐藤先生は現在、藤田保健衛生大学脳神経外科の加藤庸子先生を主治医としてリハビリに励まれております。日曜日にはお子さまたちとご一緒に車椅子に乗ったままドライブやお散歩を楽しまれておられる由です。もう既に松坂屋へショッピングにお出かけになられたとのこと、少しお疲れになられたようで、当分ショッピングはお預けのようでした。しかし、頭脳は明晰、言語明瞭で、お見舞に行きましてもお話ができるのは何よりのことと存じます。一日も早いご快癒をお祈りしつつ、日本女医会会長の職務代行に励みたいと考えております。

ラテンアメリカ地域担当国際女医会副会長「国吉レベカ」先生来日

副会長　**橋本葉子**

ラテンアメリカ地域担当の国際女医会副会長「国吉レベカ（Rebeca Kuniyoshi）」先生が去る10月1日に来日されました。AMDAの御招待で急遽来日が決定した由、私の所に最初のFAXが届いたのは9月17日でした。それから何度かのFAXのやりとりの結果、10月1日の来日が決定いたしました。

国吉レベカ先生を囲んで

国吉先生は1995年から1998年の間のラテンアメリカ地域担当の国際女医会副会長で、ペルー日系人協会へススマリア日秘診療所の検査室長をしておられ、小児科医でもあり、沖縄出身の日系二世でいらっしゃいます。AMDA Meetingに参加するため10月3日には広島に出発しなければなりませんでしたし、10月2日の午前中は東京女子医科大学看護短期大学専攻科生に一時間の特別講義をお願いし、夕方から歌舞伎の観劇を予定していましたので、日本女医会の方々にお会いできるのは10月1日の夜だけというスケジュールになってしまいました。9月27日の理事会にお諮りいたしましたと

ころ、数名の理事が夕食を共にされるご希望がありましたので、セッティングいたしました。一方、看護短大での講義は“Weight and Height in Peruvian Children with Japanese Ancestry”と題したものでしたが、スライドがスペイン語であり、ご本人もスペイン語の方が話しがしやすいとのことで、急遽ペルーから東大医学部第二内科に留学中のDr. William Rengifo に通訳をお願いすることになりました。Rengifo はレンヒフォと発音するそうですが、とても発音しにくいので、東大でもウイリアムと呼ばれているそうです。ウイリアムをご紹介下さったのは、元がんセンターにおられた山田先生で、山田先生は何回もペルーにお出かけになって癌の放射線診断の講義や講演をなさり、たくさんの友人をペルーにお持ちの方です。10月1日の夕食会はリーガロイヤルホテル早稲田のレストラン「ガーデン」でいたしましたが、女医会から参加されたのは、石原、大坪、鹿田、橋本の四名、それに山田先生、ウイリアムを加え、計七名で、おいしい食事をいただきながら会話が弾み、和気あいあいの中に終わりました。

10月2日の学生への講義は、日系ペルー人の二・五歳～五・五歳までの二〇〇人を対象に身長と体重を測定し、1960年と1990年の日本厚生省発表の同年齢の子供と比較したデータを示されました。一般にどの年齢でも男女を問わず日系ペルー人の方が身長も高く体重も重いというデータになっておりました。ただし、身長の伸びは日本人の方が急峻であるという結果になっており、日系ペルー人は低年齢での身長が比較的高いということが言えるようです。講義の中でヘススマリア日秘診療所をビデオで紹介していただきましたが、中で使用されている大型検査機器等はJICAの援助によるものだそうです。この診療所は外来診療のみ行っており、無料診療も行っておりますが、また他の地域においても無料診療を行っているそうです。

国吉先生は検査室関係のアドバイザーを求めておられます。診療所に検査室はありますが、まだまだ遅れているということで、先生が検査室長をしておられる間に、少しでもハイレベルの検査がルーティーンにできるようなシステムを作りたいと希望しておられました。現在の検査室がどのようなものか分かりませんと、なかなかアドバイスも出来ないと思いますので、一度ペルーに行って現場を見ていただけるような方はいらっしゃいませんでしょうか？　または電話かFAXで連絡していただける方はいらっしゃいませんでしょうか？　日本女医会としても協力ができればと考えております。国吉先生の連絡先は下記の通りです。

Dra. Rebeca Kuniyoshi
Medica Jefa de Laboratorio
Departamento Policlinico
Asociacion Peruano Japonesa del Peru

日本女医会年金について

日本女医会年金委員会

最近の金融不安の中で、日本女医会年金に加入しておられます各位におかれましては、年金についてご不安をお持ちの方も多いと存じます。

私どもも山一証券倒産後直ちに緊急理事会を開き、信託銀行より三名、会計士一名の出席を求め、種々検討いたしました。その結果、日本女医会の年金は未だ何の不安もなく充分に運営可能であることを確認いたしました。さらに今後は、新たに任命された年金委員会において政府の意向をただしながら2001年に向けてより良い方向に持って行くよう検討中でございます。

日本医師会の年金状況と比べますと、女医会の年金は制度としてはるかに健全であり、かつ有利に運営され給付されております。

皆さまの大切な年金を今後とも健全、確実、有利かつ安定的に継続するよう、一層の努力を重ねて参る所存でございますので、ご安心いただき今後もご協力くださいますようご報告かたがたお願い申しあげます。

第24回 MWIA（国際女医会議）のお知らせ

時：1998年11月8日―11月13日
所：ナイロビ（ケニア）
テーマ：『女性と児女との健康に関する研究』
サブテーマ：1．女性のヘルスケアの質的検討
2．女性の健康に関する投資をめぐる国家の視点
3．弱者(vulnerable circumstances)健康に関する研究
4．女性の健康と環境
5．文化と女性、児女の健康

■情報はinternetでも得られます。
http: /africanonline.co.ke.kmwa
■旅行は阪急交通社とＪＴＢで企画する予定です。詳細は次号でお知らせいたしますが、多数のご参加をお待ちしております。

ナショナルコーディネーター　**平敷淳子**

第11回 国際女性技術者、科学者会議の案内

第11回国際女性技術者、科学者会議が下記の通り開催されます。たくさんの方々の参加を歓迎いたします。参加及び発表セッション等の問い合わせをお待ちしております。

名誉総裁：高円宮妃久子殿下
会　　長：石井道子（前環境庁長官）
会　　期：1999年7月24日(土)―27日(火)
会　　場：千葉県幕張メッセ、国際会議場
主　　催：日本学術会議、日本女性科学者の会、日本女性技術者フォーラム
事務局長：〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学部、国際交流室内
第11回国際女性技術者、科学者会議事務局　都河明子
問い合わせ：〒755 山口県宇部市小串1144
山口大学医学部内科学第二講座　**大草知子**
ＴＥＬ.0836－22－2248／ＦＡＸ.0836－22－2246

「医師の需給に関する検討会」報告

―第2報―

副会長　橋本葉子

Centro Cultural Peruano Japones
Ave. Gregorio Escobedo 783,
Lima 11
Peru
TEL: 511-461-1151, 511-461-9291
FAX: 511-463-1707

医師の需給に関する検討会（第四回）が10月9日(木)10：00～12：00まで通産省別館で行われました。議題には、

1、医師の需給の推計について
2、医師の需給に関する論点の整理

が挙げられました。

医師の需給の推計について

1、二次医療圏別医師数及び人口一〇万対比
2、診療科別の患者数と医師数
3、昭和59年から平成6年の一〇年間における医師の勤務先の変化
4、人口一〇万対医師数の年次推移

が参考資料として挙げられました。医師需要の推計に当たって考慮すべき因子として、前回の検討会報告を基に以下の因子について検討しました。

1、患者数の動向

①人口構造：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」（平成9年1月）をデータとして利用する。

②外来患者数：厚生省大臣官房統計情報部（「患者調査」（平成8年）を利用する。

③入院患者数：厚生省大臣官房統計情報部（「患者調査」（平成8年）を利用する。

④要介護老人数：寝たきり老人は2025年には現在の二・五倍、要介護痴呆は四倍に増えると計算する。

2、医師提供体制

①臨床医一人当たり一日外来患者数：四二人
患者一人当たり診療時間：一〇分
臨床医の勤務時間：七時間
として計算する。

②対要介護老人：新ゴールドプラン達成段階の基盤整備案に従う。

③大学病院：医学教育を考慮した適性数を計算する。

④臨床研修指導医：研修医対指導医の適性数を計算する。

⑤臨床研修医：研修期間のため医療労働力とみなすか否か考える必要がある。

⑥僻地医療・救急医療：無医地区は平成6年9月現在九九七ヵ所、救急医療は一般医療の一・五倍は必要である。

3、その他

基礎医学・行政・予防分野：年間一〇〇人増加すると計算する。

検診医：独立した職種として二、〇〇〇人と計算する。

製薬企業：製薬企業内医師数はInternational Federation of Association of Pharmaceutical Physician (IFAPP) 調査を参考とする【日（七三）、米（一、五〇〇）、英（五〇〇）、仏（四五〇）、独（四八〇）】。

以上、医師需要の推計に対して考慮すべき項目についておおよその意見交換はできましたが、推計に当たり七十歳以上の医師の稼働率は0としているそうです。

その他の意見として、

(1)その他の項目に「医療機器関連の企業」などにも医師の需要はあるのではないか。

(2)外来患者数の推計は医療保健が急激に変化する中では難しいのではないか。

(3)入院患者は、三ヵ月未満の入院患者は一般病床、三～六ヵ月は療養型病床群に入院、六ヵ月以上は社会的入院とみなすという前提で算出するとされている。新ゴールドプランに伴い、介護体制が整備されるので、社会的入院は解消すると考えられているが、この解消時期はいつごろと予想されるのか。新ゴールドプランの達成時期は平成12年とされているので、この時期に社会的入院が解消されるとは考えられない。

(4)総合診療科も考慮する必要がある。

(5)女性医師の稼働率をどうするか。など、実際の推計に当たってはまだまだ難題がありますが、今回の会議の討論を踏まえて次回は推計が提出されることになりました。少なくとも女性医師の稼働率は、M字形になる三十歳代は〇・八くらいの換算にして後は一・〇でよろしいのではないか、また七十歳以上の稼働率0というのは現実に余りにもそぐわないのではないかという意見を出しておきました。議題の2、医師の需給に関する論点の整理は次回に回されました。

渉外部だより

渉外部　田中蘭子

今秋、渉外部の理事として出席した行事の報告をします。

一、男女共同参画推進地域会議

平成9年度、北海道・東北・関東甲信越地区の会議が埼玉県主催で、10月30日に、大宮ソニックシティホールで開催されました。男女共同参画二〇〇〇年プランに基づく施策と推進のための具体的な方法を、社会制度の見直し、意識の改革などを含めた多方面の場での論議を検討してゆくという盛りだくさんの会議でありました。二千人を越す参加者の多数は女性でしたが、結構な数の男性の姿もあって、さすが男女共同参画会議と思わせられました。また婦人参政権を得て半世紀、今さら共同参画かとの思いもありましたが、国の政策にかかわる国会議員の女性の数7％という世界の先進国では最下位に近い現状を考えると、二十一世紀への展望として喜ばしいことには違いない。医療の現場で男と対等に仕事をしつつ、プライベートにはより多くの労力を費して、未だに低い評価の女医たちの思いを新たにしながら、これらのプランに積極的にかかわる行動を持たねばならないと痛感しました。内閣直属の総理府に、男女共同参画室がある事実を評価して、女医会は大いに意見具申すべきだと思います。ちなみに、男女共同参画審議会のメンバーは女性対男性比六対四だそうです。

二、女性関係団体との「政策懇談会」

11月6日、自民党本部において開かれた会には、次の九団体が出席しました。

ニュービジネス協議会女性経営者委員会

全国商工会婦人部連合会
全国婦人税理士連盟
日本女性エグゼゲティブ協会
各種婦人団体連合会
日本退職女教師連合会
日本ケアワーカー協会
日本女子薬剤師会
日本女医会

以上の代表たちが、それぞれの立場からの提言、要望を述べることになり、当女医会は、選択的夫婦別姓に関して民法改正を求める要望を提出しました。この件については、婦人税理士連盟からも同じ提言があり、心強く思っていましたが、各種婦人団体連合会からは、真向から反対の意見が出されており、その理由として、日本的家族、結婚の価値観が根本的にくつがえるとし、また国が計画している在宅介護の老人福祉プランの基本にある親への扶養意識を失いかねない等、時代錯誤的な思考がのべられていました。半世紀も前に改正された民法で、結婚は両性の合意に基づくものとされ、家制度は消失した筈であり、家族とはそのような呪縛と別の関係で、現在、親の扶養、特に老親の介護における女たち（嫁または娘）の葛藤が、どれほど家族、夫婦の関係を危うくしているかという認識すら無いのには、開いた口が塞がらないというより、話にならないという諦めの心境になったことでした。11月の理事会でこの話をした時、橋本会長代行より、国会議員の中での夫婦別姓に対する意見が、積極的賛成、消極的賛成がそれぞれ25％ずつで50％、積極的反対、消極的反対がそれぞれ25％ずつで50％で、きっちり半々であるという現況が報告されました。

またこの懇談会の時間が、木曜の午前11時から12時半だったので、このような時間帯では、最も活動的な年代の女性の意見を求めるにはふさわしくないといった所、では夜に酒でも飲みながらですか、と少々ふざけた感じの返事をいただきました。

各種団体は数にして五十二もありお呼びのかかったのは、九団体だからということは、なるほど、呼んで頂いたのかと納得した次第です。

三、国立婦人教育会館　開館二十周年記念式典と国際シンポジウム

11月14日、埼玉県嵐山町に文部省の附属機関として昭和52年（一九七七）に開設され、二十年間に利用者延べ二〇〇万人に達し、婦人教育、家庭教育のための研修、交流、情報提供の場として機能して来たと謳っていますが、近年、女性学の台頭に伴い、ジェンダーに関するセミナー等が目立つようになって来た歴史が紹介され、式典もシンポジウムもかなりの人数で、盛会でした。

シンポジウムは「二十一世紀へ向けての女性ネットワーク」が主題で、原ひろ子、村松泰子、藤枝澪子、国信潤子、小玉美意子、藤原房子氏等、近年女性学に著名な教授連が揃い、また韓国、インド、オランダ、アメリカ、チリなど、多彩な顔ぶれの外国人女性問題専門家たちが各自それぞれの国内婦人情報の紹介をされましたが、いずれもまだまだ来世紀への基盤作りの段階に見受けられました。

私は会館から車で二十分少々のところに住んで居り、日常、車無しでは生活できない不便さを痛感しているのですが、会館を利用するたびにいつも違和感を覚えます。東武東上線の武蔵嵐山駅より徒歩十数分といって、すぐわかる方は少ない不便な場所であるのに、送迎バスなどは形だけの少なさです。二十一世紀へ向けて、民間企業的な発想を持って、より多くの利用に応えて欲しいと願わずにはいられません。

第24回国際女医会会議の現況

国際女医会副会長（西太平洋地域担当）　橋本葉子

第24回国際女医会会議がケニアのナイロビで1998年に開催されることは、1992年グワテマラにおいて開催された国際女医会議総会会で決定され、その会長はDr. F. Manguyuであることが決定されておりました。オランダのハーグにおける第23回国際女医会会議総会（1995年）の席上、Dr. Manguyuは1995年～1998年までの国際女医会会長として就任し、現在に至っております。その間、1996年及び1997年の二回、国際女医会役員会議が国際女医会事務局が置かれておりますドイツのケルンで開かれ、主にナイロビにおける国際女医会会議について検討されて参りました。1996年の役員会議ではナイロビの国際会議についてホットな討論が行われ、一応の結論が出て、ケニア女医会が準備を始めたわけです。この時点で一番問題になったのは、国際会議の会期に関してでした。ケニア女医会としては最も気候の良い12月を推薦しましたが、12月はクリスマスが近いので難色を示す役員もいました。しかし、結論は12月ということになって散会したわけです。

ところが、1997年5月に行われた役員会でManagement groupから重大な問題が提起されました。それは会長Dr. Manguyuへの辞職勧告でした。国際女医会副会長グループは寝耳に水のことで一瞬呆然としました。真の理由は分かりませんが、新制ケニア女医会から、Dr. Manguyuが1994年からケニア女医会員ではないという連絡が国際女医会事務局に入ったからということでした。Dr. Manguyuが会長に選出された時点では確かにケニア女医会員であった筈です。副会長グループは、国際会議を一年半後に控えたこの時期に会長を更迭したら、1998年の国際会議が開催できない可能性があるとして反対しました。

この会議でもう一つ問題になったのは、やはり会期の問題でした。今回は12月は反対が多いので撤回し、8月または11月という線が打ち出されました。私は11月は学会等も多いので、出来ましたら8月の方がよいと思い、8月に手を挙げましたが、これは6月に開催予定のケニア女医会総会の決定にゆだねられました。

一方、この時点でケニアの国内情勢が不穏になり始め、ケニアでの開催に反対する意見もちらほら出ておりました。しかし、これもケニア女医会に任せることにしました。

その後、7月に国際女医会事務局を通して、ケニア女医会からの質問状が届きました。それは、

1、国際会議の日時を11月10日～14日まで、または11月17日～21日までのいずれがよろしいか？

2、会議場をコンベンションセンターからサファリパークホテルに変更することの是非

3、登録費をUS$二五〇とすることの是非

というものでした。私は

1：11月10日～14日まで、

2：Yes　3：Yes

との回答を送りました。ケニア女医会は会期を1998年11月8日～13日に決定したようです。

6月から8月にかけて、世界のいろいろな国からケニアの情勢に不安を抱き、会場をケニアから他のどこかに変更してはいかがという意見が国際女医会事務局に届けられたようです。西太平洋地域ではオーストラリア女医会が開催地変更の要望を提出しております。一方、ニュージーランド女医会は、アフリカで初めて開催されるケニアのナイロビでの国際会議を支持する意志表示を国際女医会事務局に送っております。その最大の理由は、今回のテーマ"Investing in the Health of Women and Children"はアフリカが最も大きな問題を抱えていること、ケニア女医会は国際会議に向けて頑張っていることを挙げております。

Dr. Manguyuに関しても霞がかかっているような状態です。私個人は会長と会議開催地の問題は別個であるという立場から、会長はDr. Manguyu開催地は可能ならば変更してもよろしいのではないかと思っておりました。いずれにしてもケニア女医会の意志を尊重することにしておりました。

9月に入り、会長及び開催地問題がいつまでもはっきりしないのは困るということで、9月19日付で副会長グループがManagement groupに対し意見書を提出いたしました。中央ヨーロッパ地域担当の副会長Dr. Gertrud Zickerがとりまとめの労をとられました。意見書は、①会長更迭になれば国際会議への参加者は激減するであろう。②ナイロビの国際会議参加者に対する安全性の確保について考慮する必要がある、という二点についてであります。

日本のケニア大使館からは、《ケニア女医会国際会議組織委員会から、「1998年11月10日～14日までナイロビで開催される第24回国際女医会会議について、参加者の安全が保たれるか否かについての問い合わせがケニア女医会に届いている」という情報がケニア大使館に届いたが、ケニアの安全性確保は国家のコントロールで行われている。ケニア大使館は、現在も、国際会議が開催される1998年末頃も、何の不安もないことを保証する。》との9月22日付けの手紙が日本女医会に届いております。

本日届きました国際女医会事務局からのレターによりますと、Management group Meetingが10月30日～11月1日に開かれ、Dr. Manguyuがケニア女医会会長として認められ、国際女医会会長としてナイロビの国際女医会会議を主催することが再確認されました。従いまして、紆余曲折はありましたが、国際女医会会議は1998年11月8日～13日まで、ナイロビにおいて開催されるものと予想されます。細かいアナウンスは未だですが、そろそろサーキュラーが届くのではないかと期待しております。

（平成9年11月10日現在）

私の大学【関西医科大学】

大阪第7支部　西嶋攝子

私の母校関西医科大学は、昭和3年6月30日大阪女子高等医学専門学校として大阪北東の地（現枚方市牧野）に誕生し、昭和22年には大阪女子医科大学に昇格、昭和29年には関西医科大学と改称して男女共学制となり、今日に至っている。平成10年6月に満七十年を迎える。

すでに六千人を越える医師を世に送り出しているが、その56％にあたる三四〇〇人あまりが女性医師である。かつては関西をはじめとする西日本で、"女医さん"と言えば関西医大の卒業生を意味したくらいである。しかし女性のしめる割合は、男女共学制となって以降急速に減少している。

私は昭和40年に入学し、46年に卒業したが、七六人の同級生のうち女子学生はわずかに一一人（15％）であった。最近やや増加傾向にあるが、それでも平成9年度の新入生一〇〇人のうち女子学生は二四人（24％）にすぎない。すでに男性の大学ともいえる状態であり、大学内での女性医師の存在は残念ながらマイナーなものである。

昭和35年から大学の本部は大阪府守口市に移っており、私ども二年間の教養部のみを枚方市牧野で学んだ。昭和22年8月に現在私が勤務している香里病院を買収して附属病院の一つに加え、その後附属男山病院、附属洛西ニュータウン病院を次々に開設し、現在ベッド総数一八三六床、一日平均外来患者約四七〇〇人である。洛西ニュータウン病院以外は、本部・香里病院・教養部・男山病院すべて京阪電鉄の沿線に位置しており、京阪大学（？）の別名を頂戴しているほどであり、沿線にはたくさんの卒業生が開業して活躍している。

満十八歳で入学して、すでに三十年以上大学に居続けていると、かえって大学の変貌に鈍感になり、久しぶりで母校を訪ねた同級生が、大学の発展に驚く姿をみて、改めて驚くありさまである。現在母校は創立七十周年を記念して、本部の附属病院を建て替え中である。二十一世紀初頭には新しい病院が出来あがるが、その時を同窓の先生方、同級生の人たちとともに待ち望んでいる。

学術部主催ワークショップ予告

テーマ　【脳血管障害の診断と治療】

講師　①〈シャーカステンを用いた形式〉

『脳血管障害の画像診断、CT, MRI』
鎌田憲子先生（東京都立駒込病院放射線科）
榎本京子先生（埼玉医科大学放射線科）

②〈講演〉

『脳血管障害の症状、臨床診断、治療と予後』
山本紘子先生（藤田保健衛生大学神経内科）
『くも膜下出血の治療』
加藤庸子先生（藤田保健衛生大学脳外科）

時　1998年2月28日(土)　15：30～17：30

所　東京シティクラブ

＊ご案内はすでにお送りいたしましたが、皆さま多数の参加をお待ちしております。

ロシアの旅

神奈川支部　稲生　襄

1997年夏、念願のロシアの旅を決行し得たので書かせていただく。

7月18日から十日間、モスクワとサンクトペテルブルグ（旧レニングラード）の他、日本の奈良のような旧都スズタリ地区だけである。男性二、女性八に女性添乗員というメンバー。皆旅なれた人々ばかり。

成田から十時間二十分にてモスクワのシェレメチェヴォ空港着、気温、一九度、時差六時間。空港にて一万円をルーブルに変えたが一〇〇円が五〇〇〇ルーブルに当り、あまり使わず、ほとんど円とドルを使用した。ロシアの五十歳前後の女性ガイドに迎えられ、種々の案内を受けた後クラシックなホテル〝ウクライナ〟に泊る。

モスクワ観光

モスクワは創立八五〇年とのこと、軍隊も出て大変な準備作業中であった。

赤の広場（クラスナヤブロシャチ）

本当は〝美しい広場〟という意味なるも、以前メーデーや革命記念日に赤の垂幕が建物の壁面に下り、人人も赤い旗を手にして広場が赤一色になったから赤の広場とよばれるとのこと、うなずけた。

たくさんの建物の内部はとてもすばらしく、特に武器庫内の武器類はじめ、衣裳、宝飾品は見事な品々ばかりで驚嘆した。

文豪トルストイの家、レーニン廟、チェーホフの家、各種教会、修道院、名士の墓、モスクワ大学、美術館などを見学。有名な地下鉄にも乗ってみた。七十年前開通との地下鉄構内は大理石で美しい装飾が施されており、地下宮殿といわれるに値する豪華さ、そしてエスカレーターが物凄いスピードで地下まで一直線に人を運ぶ。第二次世界大戦中は防空壕の役をしたとのこと。

モスクワ川のクルージングも大変よかった。夜は本場のボリショイサーカスをみた。

スズタリ

モスクワから東へ二二〇キロ（バスにて約四時間）の地にあるが、途中ウラジミールにも寄る。十二―十八世紀のロシア正教会の建造物が多く、丸屋根が黄色に輝いているため『黄金の環』と呼ばれている。寺院の美しい鐘の響きはロシアの人々の心の故郷であると。修道院や寺院をたくさんみて、スズタリGTKなる大きいが余り設備のよくないホテルに泊った。

サンクトペテルブルグ

夜モスクワから頑強な寝台列車レッドアロー号（赤い矢）にてサンクトペテルブルグに向い、早朝到着した。ソ連時代のレニングラードである。アストリアホテルにて休憩の後観光に出発、ガイドは三十歳くらいの男性、グレープさん、まず美術品の宝庫エルミタージュへ。

北のベニスといわれるこの地は帝政ロシアの首都と、ソ連時代の顔と二つある（現地ではソ連解体後を、〝改革〟といい、一九一七年の政変を〝革命〟といっている）

ピョトル大帝のあと女帝がつづいたがロシアの貴族文化の頂点エカテリーナ二世はドイツ生れの女性なるもピョトルの娘エリザヴェータに大変気に入られ、甥と結婚する。知的な彼女は夫のピョトル三世をクーデターで葬って、女帝となり、広大なロシアを三十四年間治めた。そしてエルミタージュ（隠れ家）なる美術館をつくった。全くすばらしいの一語につきる。二、三週間かけても見きれないほどのものを三時間くらいでは……。

教会や修道院をたくさんみて、マリンスキー劇場では〝白鳥の湖〟のバレーを観る。劇場そのものが美術館のようですばらしかった。終了して戸外へ出たのは十時半なのに、まだまだ明るく驚いた。刑務所博物館をみて感無量になる。

ピョトル大帝の〝夏の宮殿〟はこれまたすばらしかった。たくさんの噴水と彫像でピカピカに輝いていた。

サンクトペテルブルグホテルにてのフォークロアショー（アサヒナイト）をみた。ロシア民謡を中心にしたもので盛りだくさんであった。

お土産店では琥珀、キャビア、マトリョーシカ人形、塗り箱等々、競って求めた。何らのトラブルもなく快適な気候、ヨーロッパ並の食事、盛りだくさんの観光の数々に一同満足して帰国した。

理想の福祉ゾーン建設
私の仕上げの仕事に

茨城支部　荷見ヒサ子

平成7年10月、医療法人貞心会の理事長を長男に譲り、会長職に就いてから三年目。とはいえ、楽隠居を決め込んではおりません。診療でも現役を務めながら、温めていたプランの実現に向かって忙しい毎日を送っています。

プランとは、私が理事長を務める特別養護老人ホーム西山苑の新築移転計画です。この計画には常陸太田市当局も加わり、特養を核とした保健福祉ゾーンを形成しようというものですが、この地に特養西山苑を建設し、運営してきた私どもの実績をすべて投入して、コンパクトながら、行き届いた内容の施設にしたいと、心を砕く日々です。

折しも岡光、小山某の特養を舞台にした不祥事、公的介護保険制度導入問題、厳しい緊縮財政状況など、混沌とした医療・福祉環境の中で進めなければならない事業となり、初めて特養を手がけた時には感じなかった難しさも味わっております。

振り返れば、九歳を頭に一男四女を残して夫が三十七歳の若さで逝ってから無我夢中で子供を育て、診療をしてまいりました。幸いかな私には女医という天職がありましたし、母親の奮闘を見て育った子供たちは全員医者になり、それぞれが大なり小なりに私を助けてくれています。

地域の応援も大きかったと思います。当時女医は珍しく、地方紙などにたびたび取り上げられました。常陸太田市は、水戸黄門で知られる徳川光圀公の隠居所西山荘がある古い地方都市ですが、背後に過疎の山間地を抱えています。義父がこの地に西山堂医院を開業した当時、周辺は桑畑やタバコ畑の多い農村で、義父は外車でよく往診にでかける評判の

よい医者でした。ともに医者だった夫が亡くなり、医院を継いだ私も、慣れない田舎道を往診に出かけることが多かったのですが、そこで目にした光景は、がらんとした農家の一室で汚物にまみれ、寝たきりになっているお年寄りの姿でした。

特養開設の必要を痛感した大きな動機です。その後、私の思いを応援してくれる人たちの登場で昭和47年、西山苑を開苑することができました。老人ホームの運営にともなって医療の拡充を迫られ、昭和53年、西山苑に隣接して西山堂病院を新築移転しましたが、西山苑はさらに良き施設長を迎えて実直でやさしい介護スタッフが育ち、充実した介護内容をもつ日本有数のホームといわれるほどになりました。

昭和58年には老人福祉に特別な貢献の由を持って天皇陛下からご下賜金が授与され、また私自身は昭和62年、社会福祉に貢献の功労ということで、「吉岡弥生賞」をいただきました。その同年に老人病院はすみ敬愛病院を、平成2年には慶和病院を開設し、今日に至っています。

そして現在、西山苑の新築移転計画に夢中の私です。開苑から二十五年が過ぎて、施設の老朽化は無論のこと、高齢者を取り巻く社会環境や施策にも変化が見られます。かつて養護を目的とした収容主義の特養建設の考え方を方針転換し、在宅介護の推進になったこと、高齢者福祉予算の高騰の中から浮上した受益者負担の公的介護保険制度の導入問題、そして個人のプライバシーを尊重した施設の個室化の傾向などは、隔世の感さえあります。

こうした社会の趨勢の中で高齢者の福祉、医療、保健をどう保障していくかです。豊かになったとはいえ、要介護の高齢者、またその家族のニーズは高いものがあります。その社会的要請に応えていくことは医療に携わる者の務めと任しています。

福祉ゾーンの構想には、地域総合保健センターと特養を核としてデイケアセンターやグループホーム、ケアハウスを配置するなどのプランが浮上しています。これまでも医療法人として訪問看護を推進し、西山苑では市とタイアップしてデイケアも行っており、ソフト面は何も心配なことはありません。あとはいかに機能的な施設を低予算で建設するかにかかっています。

この構想を成功させ、老後に不安のない地域づくりを、そして息子夫婦や病院業務に参加している娘、娘婿などに喜んで事業を引き継いでもらえるようにしたいと念じています。

七十も半ばを過ぎてなお健康で働けるのは、若い頃よりたしなんでいる社交ダンスのおかげかもしれません。また最近では大好きなシャンソンを習い始め、リラックスしたひとときも楽しんでいます。そんなエネルギーの充電をしながら、これからしばらくは、私の仕事の仕上げに向かって、前進あるのみです。

三神美和著「九十三歳　今日を愉しんで生きる」に寄せて

埼玉支部　村田　郁

このご本を手にした時、カバーの装画を見て、「なんと美しい絵だろう」と思いました。紅、薄紅、黄のカーネーションの投入れを描いたものですが、カバー折返しに掲載された三神先生の笑顔とともに、暖い雰囲気を醸し出しています。読み進むにつれ、随所にご両親への思慕と感謝の心をシンボライズしているのではないかと、思えるようになりました。

父上が若くして他界されたため、九人の子供を最高学府まで教育され、また母上への感謝は、ひとしおのものと拝察できます。

出版社からこの本の上梓を勧められ、固辞されたものの、今一番大切な高齢化社会の「老人問題との関係があるかもしれない」と思い直されたと、「あとがき」にあります。女性の平均寿命八十歳とのびた現在、せっかく与えられた余命を愉しく暮したい女性、また自立した老後を目指す女性にとって、本書は絶好の処方箋であり、座右の書といえるのではないでしょうか。

女性の平均寿命は、百年前には四十四歳でした。それが一九七四年になると七十六歳となります。いわれて久しい「人生五十年」に相応する人間の生き方についての、考え方や知恵は積みあげられています。しかもこの時代に長寿を保つ人は希有な存在として周囲の人々から敬われ、大切に思われていたと思います。しかし高齢化社会に向う現代、独居を余儀なくされる人々に、延命となった三十年余りの生き方を示す書物は多くありません。

先生はご著書の中で、優しい語り口の中から、我々に年を重ねる不安を癒す勇気を与えてくださいます。それは先生ご自身が、溢れる勇気をもって九十年の人生を歩んでこられた自信からでしょうか。

至誠。「TREUUND」(独)きわめて誠実なこと、まごころという意味のこの言葉を会の名前にした社団法人・至誠会。東京女子医大の同窓会であり、病院も経営しているこの団体の会長を二十年余続け、大正13年から約七十年間医療に携わってきた女医の歴史の生き字引きともいえる先生です。

恩師吉岡弥生先生の薫陶を受けられ、遺志を受け継ぎ、女子医科大学病院の今日をあらしめた歴史とともに歩んでこられました。それは、関東大震災、戦災、労働争議など、さまざまの試練を乗り越えた苦難の道程でした。病院の存続、夜間高等看護学校の設立など拡張を図りました。それはまた、女性の社会進出、医療の場での優れた女性の役割りを信じての活動でした。

「男も女も医師としての技量に何らかわりない」。こうした医学への情熱、プライドが常に先生を支えていたのでした。先生の日々の生活も紹介されています。他人には決して甘えず、背筋を伸ばした生活ぶりです。折にふれ短歌や俳句にも挑戦され、その探究心は目を瞠るばかりです。こうした溌剌とした生き方は、我々高齢に向う女性にとって、まさに鑑といえるでしょう。

当初、先生の著書の感想を述べるなど、畏れ多く、私などもっての他と悩みました。しかし今、先生のご本を紹介できた光栄を、有難いことと感謝しています。

最後に、我々の範として、ますます先生がお元気であられますよう祈念して筆を擱きます。

ぜひご一読をおすすめ致します。

＊

九十三歳　今日を愉しんで生きる
著者　三神　美和
一九九七年十日十日第一刷発行
発行所　株式会社　海竜社
中央区築地二―十四―一
郵便番号　一〇四―〇〇四五
電話　〇三―三五四二―九六七一㈹

平成8年度 日本女医会会員学位取得者一覧表

（学術部）
平成9年12月10日

全国医科大学80校に調査依頼し46校より回答あり結果275名の学位取得者中8名の既会員がおり、会員外で住所判明の267名に入会のお誘いをし4名の入会あり。（※印は平成7年度学位取得者）

（敬称略）

支部	氏名	出身校	卒年	論文名
北海道	木村　幸子	札幌医大	h 3	Immortalization of Primary Rat Cells by Reciprocal Complementations of Human papillomavirus Type 16 E7 and Adenovirus Type 5 E1A Mutants（ヒトパピローマウイルス16型E７遺伝子及びアデノウイルス５型E１A遺伝子変異株の相補による初代培養ラット細胞の不死化）
青森	※ 丹藤伴江	弘前大医	h 3	“ほてり”発現とcalcitonin gene-related peptideとの関連に関する研究
埼玉	鈴木　恒子	埼玉医大	s 59	「新型フレキシブルディスク眼内レンズの水晶体嚢内安定性と視適性について」
世田谷	幸野　敬子	東女医大	s 52	サルコイドーシス患者の血清総adenosine deaminase活性及びadenosine deaminase isozyme活性の検討
練馬	藤岡　和美	東邦大医	s 62	Relationship Between Ultrasonographic Findings and Histochemical Expression in Breast Cancer（乳癌における超音波所見と組織科学的発現との関連について）
学内	岩部　千佳	東女医大	h 2	膵外分泌調節因子としての内因性インスリンの役割に関する研究
学内	金室　麗子	東女医大	s 55	妊婦における血中プロインスリン分泌動態
都下東	松本めぐみ	金沢医大	h 1	人間ドットにおけるタイプA行動パターンに関する検討—東京地区の若年男性におけるJAS-Factor J(Jenkins Activity Survey-Job involvement)の意義—
神奈川	大野　祐子	聖マリ医大	s 61	産婦人科領域の腹腔鏡検査および開腹手術がカテコールアミン分泌動態に与える影響
石川	土島　睦	金沢医大	s 59	肝細胞癌患者における血清PIVKA-II測定の臨床的意義—アビディン—ビオチン法を用いた高感度測定法による検討—
福岡	徳永　良子	東女医大	s 58	The ganglionic stimulation by angiotensin II and receptors as well as signal transduction involved in the dog cardiac sympathetic ganglia.（イヌ心臓交感神経節におけるアンジオテンシンIIの節興奮作用と関与する受容体ならびに情報伝達系について）
福岡	水間日香里	久留米大医	h 4	Diagnostic use of daytime polysomnography versus nocturnal polysomnography in sleep apnea syndrome（睡眠時無呼吸症候群における昼間と夜間の睡眠ポリグラフの診断的有用性）

「選択的夫婦別姓に関する民法改正について」の陳情

副会長　橋本葉子

「選択的夫婦別姓に関する民法改正について」という要望書を、衆議院議員大島理森先生を始め、家族法改正に関する小委員会の各氏宛提出したことは、前号でご報告いたしました。この件に関しまして、やはり大島理森議員および藤田秘書のご尽力により、家族法改正に関する小委員会の主な委員にお目にかかって直接要望書の意義をお伝えする機会を作っていただきましたので、11月18日(火)の午前中に、青森県支部会員の花田チヅ先生と陳情して参りました。要望書は佐藤千代子会長のお名前で提出してありましたので、佐藤会長のご承認の基で橋本が会長代理として陳情に伺うことを了承していただきました。

小委員会では、この問題について各方面からアンケートをとったり、各界の識者たちの意見を聴いたりして、大分議論されたそうですが、四分の一は積極的に賛成、四分の一は消極的に反対、四分の一は積極的に反対と、物の見事に25％ずつ意見が分かれたそうです。民法改正となると大きな問題になりますが、問題になる点の法改正で切り抜ける方法もあるのではないかとご研究いただいた由です。しかし、結論には至りませず、現在は沈黙状態になっているとのことです。一般論とした場合はこの結果はなるほどと思いますが、日本女医会として要望したように、ある特殊な環境にいる女性にとっては大問題であるということを、今回は委員の皆様に理解していただけるよう、なるべく事例を基に説明して参りました。

現内閣は目下行政改革に全エネルギーを注いでおりますので、われわれの要望は時期を改めて審議をしていただくことになるようです。そのためには機会を見てまた問題提起をする息の長い運動が必要のようです。

理事会議事録

日　時：平成9年7月26日(土)
午後4時00分より

場　所：(社)日本女医会会議室

出席者：佐藤、加藤、石原、橋本、大坪、栗原、佐々木、鹿田、清水、田中、橋川、久田、平敷、松井、丸茂、宮原、村田、吉崎、野澤
（以上19名）

欠席者：青井、大澤、川田、澤口、西嶋、松本、中濱
（以上7名）

議事検討事項

一、庶務報告　鹿田理事
別紙どおり報告、承認される。

二、会計報告　栗原理事
平成9年6月分収支別紙どおり報告、承認される。

三、各部報告

【学術部】平敷理事
・大阪で10月初旬にワークショップ開催を企画中。

【渉外部】松井理事
・「NGO国内婦人委員会」、「国際婦人年連絡会男女共同参画二〇〇〇年プランの推進について聞く会」に出席の報告。

【広報部】佐々木理事
・25日に第151号会誌の割付会議を開催。

【事業部】丸茂理事
・新事業を検討中。

【会長報告】
・埼玉県支部総会、京都支部総会、群馬県支部総会に出席。
・「選択的夫婦別姓」の要望書文案を作成、提出の予定。
・厚生省より橋本理事を「医師の需給に関する検討会委員」に委嘱したい旨の依頼があり、承諾した。
・「参議院女性国会」へ応募のお誘い。

四、会員名簿について
・新たに記載すべき事項を現行の名簿を参照し改正した結果、改めて見積りをとる。
・記載内容が多項になり金額が嵩むため、より多くの広告協力企業を探す。
・サイズはB5版に変更。

五、国際女医会議について
・来年予定の国際女医会議のケニア開催の時期に関する国際本部からのアンケートへの回答を検討する。
・選挙に関しては情報を集め検討する。
・プロモーションビデオ、女医会のロゴ等を作成し、PRをする。

六、自然退会者について
・自然退会者の見直しのため、会費滞納者の減少を図る方法を討議し、自動振替での会費納入を再度お願いすることに決定。

七、その他
・事業部として実益のある事業を検討中。
・「入会のしおり」は二色刷りとし、見積りを早急にとる。

以上

副会長（庶務部担当）石原
鹿田、清水、橋川、宮原

理事会議事録

日　時：平成9年9月27日(土)
午後4時

場　所：日本女医会事務局

出席者：佐藤、石原、橋本、青井、大坪、栗原、佐々木、澤口、鹿田、清水、田中、橋川、久田、平敷、松井、松本、丸茂、宮原、村田、吉崎、中濱、野澤
（以上22名）

欠席者：加藤、大澤、川田、西嶋
（以上4名）

議事検討事項

一、庶務報告　鹿田理事
別紙どおり報告。

二、会計報告　青井理事
平成9年7月分、8月分収支別紙どおり報告。　承認
栗原理事より現在までの会費納入状況の説明があった。

三、各部報告

【渉外部】松井理事
・「東アジア女性問題国内本部機構上級担当官会議歓迎レセプション」、「男女共同参画社会づくりに向けての全国会議」に出席の報告。

田中理事
・「平成9年度女性学・ジェンダー研究フォーラム」に出席の報告。

【広報部】佐々木理事
・第152号会誌の割付会議9月26日に開催、10月25日に発行予定。

【学術部】橋本副会長
・10月に大阪で予定していたワークショップ開催不可能となり、年内に東京での開催を検討中。

【事業部】久田理事
・公開講演会の開催地について検討中。

【会長報告】
・中国籍の莎其拉特別会員より日本国籍の医師免許取得についての問い合わせがあり、厚生省に連絡し回答する。
・加藤副会長の叙勲記念パーティに女医会よりお祝いのメッセージを送る。
・「選択的夫婦別姓に関する民法改正についての要望書」を提出。

【National Coordinator報告】
・MWIAより年会費の納入のお礼があった。

四、会員名簿作製について
・庶務部で作成の名簿(案)を細部にわたり検討し、最終形式を決定する。
・広告への協力会社は現在のところ二六社、総額一八〇万円となっている。

五、地域医療奉仕活動への助成について
・「地域医療奉仕活動に対する助成申請書(案)」を検討・協議した結果、改めて申請書を作成する事に決定。
・会誌に「助成のお知らせ」を再掲載する。

六、講演研修会について
・大阪での開催が不可能になったが、今後協力支部との連絡を密にして地方開催を実現する意向。
・年内は東京で開催する予定。

七、2004年国際女医会誘致のための組織委員会設置について
・全理事を委員とした準備委員会を発足し、概要を決定した後、組織委員会を設置する。
・準備委員長は佐藤会長とする。
・各自の意見をまとめ、次回理事会で討議する。

八、吉岡弥生先生肖像切手発行について
・会員から協力の要請があり、女医会として支援し、事務手続き等は松井理事に一任する事に決定。

九、その他
・定款改正について、字句などの訂正は全員一致で会長と庶務部に一任することに決定。
・MWIA、ラテンアメリカ担当の副会長レベカ国吉先生の来日に伴い歓迎会を開催する。
・各部の意見を理事会前にまとめ、効率良い会議運営とする。
・事務局のコンピューターの購入を決める。
・事業部主催の公開講演会を来年2月7日に仙台にて開催予定。

以上

副会長（庶務部担当）石原
鹿田、清水、橋川、宮原

緊急理事会議事録

日　時：平成9年10月11日(土)
午後3時

場　所：日本女医会事務局

出席者：石原、加藤、橋本、大坪、栗原、田中、橋川、平敷、松井、村田、中濱、野澤
（以上12名）

欠席者：佐藤、青井、大澤、川田、佐々木、澤口、鹿田、清水、西嶋、久田、松本、丸茂、宮原、吉崎
（以上14名）

佐藤会長病気のため緊急理事会を開催した。討議の結果、橋本副会長が会長代行に決定した。

（出席理事12名、委任7名）

会よりお見舞いを差しあげる事にする。

理事会議事録

日　時：平成9年10月25日(土)
午後3時30分

場　所：日本女医会事務局

出席者：石原、加藤、橋本、青井、大坪、栗原、佐々木、澤口、鹿田、橋川、久田、平敷、松井、松本、丸茂、村田、中濱　（以上17名）

欠席者：佐藤、大澤、川田、清水、田中、西嶋、宮原、吉崎、野澤　（以上9名）

9月理事会の議事録を承認。

緊急理事会で決定された会長代行、橋本副会長を再度承認。

橋川理事より佐藤会長の病状についての説明があった。

議事検討事項

一、庶務報告　鹿田理事
別紙どおり報告。　承認

二、会計報告　栗原理事
平成9年9月分収支、別紙どおり報告。　承認
現在までの会費納入状況の説明があった。

三、各部報告

【広報部】　大坪理事
・第152号会誌の校正会議を10月23日に開催。

四、地域医療奉仕活動に対する助成申請書について
・別紙試案を全員賛成で決定し、事務局で印刷する。

五、講演研修会について
(1)平成9年度ワークショップについて
・12月20日(土)理事会終了後15時30分より、「画像診断―腹部・胸部」を京王プラザで開催。
・2月28日(土)理事会終了後に「画像診断―頭部」をとの希望があり、場所（東京シティークラブ）、時間等を検討する。
(2)平成10年度学術講演研修会について
・来年4月29日(水)、大阪での開催を大阪支部に依頼。
(3)2004年国際女医会誘致のための準備委員会について
・本日の横浜コンベンションビューローのデモンストレーションの後、誘致先を決定する。

六、吉岡弥生賞医学部門に一名、荻野吟子賞に一名の候補者がある。

七、その他
・会長の件
橋本副会長を会長代行とする。
・忘年会、新年会について
忘年会は12月20日(土)ワークショップの懇親会を兼ねて行い、また新年会は2月28日(土)のワークショップの懇親会を兼ねて行う。
・職員賞与について
次回理事会で決める。
・特別会計（ミニ傘・女医史・Dr.Iのメッセージ・ハンカチ）、ルーペンダンの在庫の報告、阪神淡路大震災災害義援金残金の処理（郵便局国際ボランティア貯金）の報告が栗原理事よりあった。
・名簿用葉書の返信のお願いを次号会誌に同封する。

以　上

副会長（庶務部担当）　石原
鹿田、橋川

会員動静

新卒入会者（敬称略）

青森支部　熊谷美香
埼玉支部　亀森真理子
江戸川支部　三枝万里子
世田谷支部　岡田京子
東女学内支部　小木曽智美
神奈川支部　栗山陽子
愛知支部　今川二紀、蜷川友華、丹羽さやか
長野支部　畑山織絵
岡山支部　篠原麻由
長崎支部　村上理絵

入会者（敬称略）

北海道支部　木村幸子、藤井美穂
青森支部　斉藤恵子、木村あさの、丹藤伴江、高橋英子、対馬葉子
埼玉支部　大塚邦江
台東支部　林堪子
荒川支部　大牟田幸子
板橋支部　野村和子
江東支部　鈴木みゆき
新宿支部　葉梨亜矢
中野支部　小川純、中村こずえ
都下東支部　茂木瑞恵
都下西支部　本郷佳代
神奈川支部　塚原玲子
山梨支部　広瀬万紀子
静岡支部　柵山恵
長野支部　佐々木仁子
石川支部　土島睦
大阪1支部　松本安代
兵庫支部　深田正代
福岡支部　生野久美子、加藤詳子、梁井桂子

物故者（敬称略）

福島支部　宗像美穂（昭19卒）
愛知支部　早川ア井（昭24卒）
岐阜支部　松波寿美（昭3卒）

退会会員数　二二名

編集後記

おめでとうございます。今年は寅年、とらは咆哮と迫力で災厄をはね返し、開運招福を招く、といわれています。この勢いを借り、多事多難を乗り越え躍進したいものです。

「風は便りの宅急便」春風に乗って北から南から続々とお便りが届けられました。ありがとうございます。

佐藤会長より嬉しいリハビリのお便り、ご快癒をお祈り致します。

橋本会長代行、加藤、石原、両副会長、共に三面六臂のご活躍で、活気がみなぎって参りました。海の向こうからのお客様（国際女医会副会長）もセッティングくださり無事お送り致しました。日本株式会社？「もがきの年」。金融不安時には、早急に緊急理事会を招集し、迫力ある会議を展開解決。我々に信頼感を植えつけてくれました。また現役教授陣による画像診断公開講座は、受講者九十三歳から二十代までと圧観、魅せられて時のたつのを忘れるほどでした。緊張の中での紀行文は、ホッと一息入れてくれるものですね。渉外も貴重な時間のやりくりをご苦労様です。われわれは市民の生命と健康を守る職業です。さらに福祉を推進なさる先達の姿勢、どれも女性ならではのパワーには、ただ驚嘆!! 反面女医を囲む環境整備に、積極的に取り組むときであることも痛感します。こんな時代だからこそ、名案と創意と、一寸の笑いも。

どうぞ新しい風をお送り下さい。

初春早々、さてどん尻にひかえしは、村田、羽織袴に裃つけて、身動きならず。しかし懸命に努める所存でございます。願ご協力。（村田）

日本女医会誌
第153号
平成10年1月25日　発行
編集人　大坪公子
発行人　佐藤千代子
制　作　㈱金剛出版
発行所　社団法人　日本女医会
東京都渋谷区渋谷2－8－7
青山宮野ビル　電話 03-3498-0571
〒150-0002　FAX 03-3498-8769